

ONE LOVE

通信

48号

2012年12月16日発行

もう師走。日本はなんとなく街が慌ただしいのでは?と思いつつ、どこいリワンドの人たちもどこか浮かれた様子。今年もあつという間に過ぎてしまいました。私たちにとって2012年はルワンダ・ブルンジに腰を落ちつける間もなく、日本・アメリカそしてケニアと移動の多い年でした。来年はルワンダとブルンジでじっくりと活動を進めたいと思います。来年も一年良い年でありますように。そして再び皆さまにお会いできることを楽しみにしています。



【レストランとゲストハウスは文武両道】

ワンラブでは活動資金を生み出すために、ワンラブランド内でレストランとゲストハウスの運営をしています。スタッフはほぼルワンダ人。出している食事はルワンダ料理であったり、西洋料理であったり。大繁盛とは言わないまでも、そこそこのお客さんが来てくれます。

しかしこの運営が大変なのであります。何しろ毎日お金の出入りがある。だから真剣にやらないと、損をしてしまうこともある。今回はそんなレストラン運営のお話をしたいと思います。

ワンラブのレストランは、緑が生い茂るワンラブランドの一角にある。そよ風の吹く中、木陰で本を読んだりするには申し分ない環境である。ゲストハウスに泊っているお客さんも、ときどき風間からレストランでのんびりしている。そんな姿を見ることができるとは喜びに等しい。

だが裏方はそんな悠長なことを言っていられないのである。日々まなじり釣り上げて、売り上げのチェックをしたり、買い出しに行ったり。

まず朝起きると、前日の売り上げチェック。今こそ、パソコンの導入により売れたものの管理が簡単にできるよ

うになったが、今までは全て電卓が頼りであった。だから領収書をもとに、何がどれだけ売れたか一つ一つ数え、現金がそれに見合っているか計算し、ミスがあれば、どこでミスが起こったかということ突き止めなくては行けない。すんなり売り上げが合えば問題ない。その日は良い一日の始まりである。しかしこれがどうにも計算が合わないのですね。たった100フラン(10円ほど)のミスであっても、それを突き止めないと、また同じミスを起こしてしまう。そのミスを犯した本人に伝え、場合によってはそのスタッフの給料からマイナスする。そんな計算をしているうちに、頭が狂いそうになってくるのです。どう追及しても、どこでミスが起こったのかわからない。そんな重箱の隅をつつくようなミス探しをしていると、時間はあつという間に過ぎ、気がつくともうお昼。こうなると、今日一日は全て予定が狂い、とんでもない日になってしまうのです。

それが終わると今度はレストランに行き、冷蔵庫に入っている飲み物の本数を数える。これはつまり、本当に領収書に書いてあるだけの飲み物が売れたかということをチェックするのです。時には領収書に書き忘れて、残っている本数が違っていたり、何故か売れたはずなのに残ってい



る本数が多かったり…。これも悲しいかな、紙上の計算通りにいかないのです。しかも冷蔵庫に入っている瓶を全部取り出して数えるから、腰へかかる負担もたまらない。今日の分の在庫を追加したり、空瓶を運んだり、腰を痛めるためにある作業と言っても過言ではない。

それが終わると食材などの買い出しである。レストランで出しているのは、鶏や魚の丸焼き、ヤギや牛肉の串焼きなどシンプルなものや、西洋のお客さんのための西洋っぽい料理である。ヤギや鶏は丸ごと買う。しかしさすがに私はヤギや鶏の目利きがないので、厨房のスタッフに任せる。まだ生きている鶏を買ってくるのだが、腿の部分に触って「うん、これは肉付きが良い」と満足そう。ヤギは最近でこそ、自分たちのところでさばかなくなったが、以前は自分の死を待つヤギの悲しそうな眼を見て、心が痛んだことよ。ドナドナの曲が頭の中で流れる。そして殺されるときにヤギの最後の一声。人間とは残酷な生き物である。私たちは他の生き物の命によって生かされているのだと実感する瞬間でもある。



ヤギの腸で作った串焼き。脂がのっていて、思わず「うまい」ルワンダビールのおつまみ定番です。

野菜やその他のものについては、近くの市場に買い出しに行く。ここでは大抵の野菜類がそろそろ。ルワンダ人が大好きなジャガイモ。いつも買うところのおばちゃんは、店の前でどっしり構えて客を待っている。大体いつも50キロ買う。ジャガイモの入った袋を担ぐのは若い衆の仕事、おばちゃんはそれを横目にルワンダの薄汚れた5000フラン札をなめなめ数えている。

この市場の脇に車を止めていると、店は構えていないが、自分のところで育てた野菜類をかごに入れたおばちゃんたちがにじり寄ってくる。彼女たちはいわゆる違法の存在ではあるが、稼ぎたいという気持ちは一緒である。時には店よりも安い値段で野菜類を売ってくれるので、見逃せない存在だ。ルワンダの野菜は、日本のスーパーで売っているようにきれいに形のそろったものではないが、実においしい。人参も生でバリバリ食べられる。

そうして一通り買い出しが終わり、厨房の調理人に渡し、やっと一息つけるのである。

しかしそんなこんなしながらも、ウェイターたちが時間通りに出勤するだろうか、サボっているのはいないだろうかなどと、目を光らすことを忘れてはならない。皆さん、何かにつけてサボろうとするのは全世界共通ですからね。あるいは買って来た食材を使って、こっそり厨房で料理し、食べてしまっていないだろうかと探りを入れる。我ながら、その発想が悲しいと思いつつも、利益を出さないことにはどうしようもないので、つい彼らを見る目が「疑いの眼差し」になってしまっているという事実は否認しない。

レストランの営業は午後から。実際にお客さんが増え始めるのは夕方からだ。私は通常5時過ぎは家に仕事を持ち帰り、パソコンとにらめっこしていることが多いのだが、たまにレストランに顔を出し、みんながきちんと働いているか、お客さんの様子はどうかチェックする。ときどきお客さんが酔っぱらって困縁をつけたり、支払いを拒否することもある。こうなるとガテラの出番です。私だとしてカッとしてしまい喧嘩になることも。だからルワンダ人への対応の仕方を良く知っているガテラに任せるのが一番なのです。それにしても酔っ払いは全世界共通である。くどい。それはさっき聞きましたよ～ということをやたらと繰り返す。そしてそのうち勝手に自分で納得して帰る。

さらにルワンダ人のお客さんは長っ尻である。帰らない。日本の居酒屋のように、終電間際あるいは営業時間終了間際に「蛍の光」が流されることもなく、ただ延々とお客さんの帰りを待つのだ。これはしんどい。私も寝たいし、スタッフも寝たい。だから終業時間間際になると「ラストオーダーですが、いかがなさいますか?」と聞くのだが、そこでラストオーダーをしても、またしばらくの後追加でビールをオーダーする。こうなるともう強硬手段で閉めるしかない。そんなわけなので寝るのが2時3時になることも珍しくない。



ワンラブのレストラン。緑がとてもきれいです。嘘だと思ったら、一度来てみてくださいね。

しかし私たちの本業は義足を作ることである。昼間はこれらの仕事もしなくてはならない。書類を作ったり、交渉のため政府のオフィスに出向いたり、来所する人に対応したり…。だから体が二つほしいのです。自分たちでまいた種とはいえ、体力的にはつらい…。

しかしそんなふうに疲れた日々ではあっても、やはりどこかルワンダの人たちに癒されていると感じる。私がどんなに頭から湯気を出して怒鳴っていても、ものの数分後にはへらへら笑いながら私のところにやってくる彼ら。飲み物を大量に仕入れ、倉庫に運ばなくてはいけない時、疲れているに違いないのに、一人でビールケースを4箱も一気に持ち、みんなで誰が早い競争しながら突っ走る彼ら。

彼らはとにかくタフである。苦笑いしてしまうくらい。

彼らがいだから、やってこれたのかな?彼らは私たちの悩みの種であるけれど、元気の素であることも間違いない。

お金のからむ仕事なので、事務仕事の手抜きもできず、私は一人で電卓をたたきながら、彼らが楽しみながら(?)やっている様子を横目で見て、舌打ちをしている。頭だけあってもレストラン運営は続かない。体力もなくては、ビールケースを運ぶこともできないのだ。

やれやれ、どうやらこれからも彼らと一緒にやっていくかなさそうだ…。

【洪水だ〜！】

支援を求めにしばらくアメリカに行っていたガテラと私。飛行機の長旅を終え、やっとルワンダに戻り、ほっと一息。次の日は思わず寝坊をし、動き出したのは午後になってから。ガテラは久しぶりに会う人達とレストランで談笑。雨季ではあるものの、今日は良く降るなぁと思いつつ、私は家の片づけ。そのうち半端じゃない降り方になってきた。そして夜も更け始めたころ、ついにワンラブランド内を流れている川が氾濫！

最初はそれでも何だかその被害を楽しみながら、のんびりと構え、自分たちの物がしまっている倉庫の荷物を移動させたりしていたが、あれよあれよと水の勢が増し、あっという間に膝の高さまで水が上がってしまった。レストランで楽しんでいた人たち（お客さんもガテラも）は慌ててカウンターの上に避難する。

冷蔵庫の電源を切り、濡れてはまずいものを移動させたりはしたが、所詮自然の勢いの前では人間は無力である。雨がやむのを待つしかない。カウンターの上に避難したお客さんは、そこから脱出するために、警備のお兄ちゃんにおんぶされ駐車場まで移動したが、転んで水浸しになり、みんなの笑いをかっていた。

実はこの日、キャンプサイトにもお客さんがいたのだが、その人曰く「寝ているうちにだんだんとテントがプカプカ浮いているような感じになった」らしい。急遽、キャンプサイトから普通の部屋に移ってもらいました。

翌朝。

とんでもないことになっていた。ゲストハウス・レストランは泥水だらけ。そして義肢製作所の大切な機械・パソコンまでもが水の中。パソコンは壊れてしまった。患者さんのカルテ、その他大切な書類も台無しである…。ワンラ

ブランドにかかっている橋も陥没し、車の通れる状態じゃない。

何から片付けて良いのか途方に暮れる。落ち着け、落ち着け。とにかくこの泥水をかき出さなくては。そして濡れてしまったものを乾かさなくては。

自分たちの力だけではどうしようもなく、近所の人たちに応援をお願いし、総動員で片づけをする。全てが元通りになるまで、かなり時間がかかりそうだ。う〜む。

レストランは営業を続けられる状態ではないので休業。しかし義肢製作所はそうもいかない。義肢装具士たちが丸となって、機械・道具や材料を移動させる。幸いなことに、ランド内には使用されていない場所があったので、そこを義肢製作所とした。義肢装具士たちは障害を持っているので、物を運ぶのも大変だが、数日して何とか作業ができるような状態になった。



洪水後の義肢製作所。機械・道具など全て移動し、戦のあとはこんな感じ。柱の色が変わっているところまで水が上がりました…。

しかしレストランの休業は痛手である。大切な資金調達のための手段が中断されてしまったのであるから。しかもレストランは少々水の流れ込みやすい環境にあったため、基本的な改善が必要になり、土を盛ったり、壁を補強したりの大改造である。

ワンラブランドの中を流れている川は、年に一度くらいはこうして氾濫することがあったのだが、これほどひどい



ルワンダ事務所代表ガテラより

【男の色、女の色】

朝、チャイ（ミルクティー）を飲むために、カップを適当にとって入れようとする、真美が「それは私のカップ」と主張する。青いカップと赤いカップ。どうやら赤いカップが真美のらしい。

「なぜ青のカップが俺の？」と聞くと「だって青は男の色だから」

どうやら日本には男の色、女の色というのがあるらしい。

真美曰く、日本の親は男の子には青っぽい色を、女の子には赤とかピンクとかの洋服を着せるらしい。逆に「ルワンダにはそういう習慣はないのか？」と聞かれた。

この違いは面白い。ルワンダは植民地にされる前は独自の服を着ていた。それは木の皮をなめして作ったものであるとか、簡単に腰の部分だけのものであるとか。

西洋人が入ってきたことにより、ルワンダに洋服が普及された。最初に入った西洋人はキリスト教の司祭たちである。彼らはみな、すその長い白い服を着ていた。そして彼らの

説教を聞いているルワンダ人は、先に述べたようなものをまとっていたり、裸に近い恰好であった。

その頃のルワンダ人にとって、洋服とはつまり、キリスト教の人たちが来ていた白い服なのである。

その後ルワンダ人も洋服を着るようになったが、いろいろなものがごちゃ混ぜになって普及したため、特に色に対して意識をすることもなく、手にしたものを着るようになった。

だから日本のように、男の色、女の色という意識がないのである。もっとも最近では西洋的な思考がルワンダにも定着してきているので、確かに男性は青っぽい色、女性は赤などの洋服を身につけている人が多いかもしれない。

しかしそうか、日本にはそんなふうに男女を意識するような基準があるのか。何だか不思議な感覚である。

しかしそれならば、なぜ真美はいつも黒とかグレーとかばかり身につけているのだ？赤い服を着たところなど、見たことがない。それとも彼女は男だったのか？

こんなふうに、お互いの国の違いや似たところを発見するたびに嬉しくなってしまうのである。

被害を受けたのは初めてである。ワンラブランドは低地にあり、雨が降ると四方から水が流れ込んでしまう。それを防ぐために排水溝を作り、川の流れが止まってしまうように、常に川さらいをすべしと掃除をするスタッフに言っていたのだが、むむ、私たちがアメリカに行っている間、彼らはサボっていたらしい。せき止められた川は当然あふれ、水が流れ込んでしまったのである…。全ての施設がやられるくらいの水だから、かなりの量である。

神はまだ私たちに休息を与えてくれないようである。しかし、まあ、考えようによっては、このタイミングで洪水が起きたのは助かったとも言えるのである。つまり私たちがまだアメリカにいる時起こってしまっていたら、スタッフだけでは対応ができなかっただろうなということだ。内輪ぼめになるけれど、ガテラがいなければ多分洪水後の修復は不可能だったと思う。

そんなふうに考え、これからも私たちは試練を乗り越えていくのである。しかし疲れた…。そして修理のための思わぬ出費、痛いな～。



今号の患者さん

今回は患者さんではありませんが、ワンラブに関わった人のご紹介。

ある日、小ざっぱりとした青年がガテラの前に現れ、こう言いました。「僕のことを覚えていますか？」

それは18年前、虐殺が終わり、私たちがルワンダで最初に生活を始めた建物のすき間で暮らしていたストリートチルドレンの成人した姿でした。

その建物は所有者が虐殺に加担したという理由で、持ち主知らずになっていた所を、ガテラが入り込み修理を加えながら生活していた場所でした。街の中心にあるこの建物の最上階に拠点を定め、そこに日本から来た私を招き入れてくれました。そこはまだ壁もなく、吹きさらしの風が入るところで、水道も電気もありませんでした。若いということは無謀であるということと同義語で、壁がなかろうと、水がなかろうと、私たちにはそれほど負担はありませんでした。

その頃キガリの町にはストリートチルドレンがあふれていました。みな、虐殺で家族を失ったり、家族が虐殺に加担し、刑務所に入れられ、帰る家を持たない子供たちです。ガテラはそんな子供たちに、その建物の一角を提供し、共に生活をしていました。

ある子はそのまま私たちの身の回りの世話をするようになり、ある子は街で小さな商売（タバコのバラ売りなど）をしたり、またある子は今までそうであったように、街で物乞いをしながら生活を続けました。

ストリートチルドレンたちは入れ替わり立ち替わり、その場所で日々を過ごしていました。しかし数年が経ち、そ

の建物の持ち主の家族が戻ってきたため、私たちも出なくてはならなくなりました。

それからさらに数年が経ち、その時そこで生活していたストリートチルドレンがガテラの前に現れたのです。

すっかり成人し、シャツをパリッと着こなしています。「あれから僕は再び街で物乞いをする生活を余儀なくされました。でも荷物運びをしたり、物を売ったりして一生懸命お金を貯めました。今では車も買って、タクシーの仕事をしています。そしてオートバイも手に入れ、人に貸して、オートバイタクシーの商売もしています。」

「みんな、僕のことをストリートチルドレンとしてしか見てくれなかったから、あの時あなたに住むところを分けてもらって、本当に嬉しかった。あの時のことは、今も決して忘れていません。あの時あなたに助けてもらったように、これからは僕も困っている人に手を差し伸べるように生きていきたいです。」

ガテラはその言葉を聞いて、どんなに嬉しかったことでしょう。生きていくことは大変だけど、こんな再会があるからやっていけるのかもしれないね。

大虐殺から18年、あの頃幼かった子供たちは、もう立派な大人になっているはずだ。彼らの人生が、今、穏やかであることを祈ってやまないガテラと私です。

【パンツも必要な巡回診療】

ブルンジで年に一度、巡回診療を行っています。

ブルンジには16の県があり、義肢装具士とともに、車に材料を積んで、それらの県を巡回します。

相変わらず来る人がたくさんいます。みなさん、それぞれ訴えかけます。義足がほしいという人はもちろんですが、それ以外にも寄り合いみたいな感じで、ただ単に足を運んでくる人もいます。彼らの楽しみはおしゃべり。旦那や嫁の悪口、子供の自慢話、どこでも世間話は一緒です。

それを横目に、義肢装具士たちは義足の型を取っています。その手つきは慣れたものです。もういちいち指図をすることはありません。見習いの義肢装具士は、型取りの準備をしたり、先輩が型取りをするやり方を見つめています。

しかし最近新たな問題が出てきました。それは…。

巡回診療に来る人たち、多くの人がパンツをはいていないのです…。だからいざ型取り！となると、パンツをはいていないから、ズボンをなかなか下ろせなかったりします。当然躊躇するからですね。

義肢装具士がさっさと仕事を終わりにしたいので「早く脱げ」と言っても、脱げないのです…。

そんな時は簡易パンツを製作します。日本で言うふんどしの感覚です。ひもを腰に結び、そこに布を渡し、マル秘部分を隠すのです。う～む、確かにこれでしっかり隠れているではないか。

簡易パンツをはいた患者さん自身もまんざらではないようです。あくまでも簡易であるにもかかわらず、家に持って帰るからこれをくれ、という人もあります。まあ、それはそれで良いですけどね。



これが簡易パンツだ！
写真ではわかりにくい
が、ひもの代わりにベルト
を使い、そこにタオルを渡
して大切なところを隠す
のである。

しかし厄介なのは女性。やはり簡易パンツでは納得がいかないようで、型取りを躊躇する。確かにこの形態ではお尻は丸見えですからね。それをなんとかなだめすかし、型を取る義肢装具士。お互いやりづらいのです。

こんなふうに、田舎に住む人は、まだパンツをはいていないことも多いようです。特にブルンジではその傾向が強いです。

う〜む、これからはワンラブのパンツ予算も組まなくてはならないか。日本でパンツを集めるのも一つの手だが、それにしてもアフリカのおばちゃんたちのお尻は半端じゃなく大きいからなあ。L サイズでも間に合わないだろう。真剣に悩む私であります。



紹介します！ワンラブのスタッフ

スタッフの紹介というよりは、スタッフがしてくれたお話を紹介します。はじまり、はじまり〜。

田舎の教会で奉仕をしているシスターが、お母さんを亡くしてしまいました。お葬式は滞りなく終わり、皆で集まって話をしています。

お葬式に来てくれた人たちは、シスターのお母さんの死を悲しみ、今も泣き続けています。

その様子を見たシスターがこんな話を。

「みなさん、お葬式に来てくれてありがとうございました。お母さんは私にとって、素晴らしい母親でした。もう何十年も前、お母さんは私を産んでくれました。生まれたばかりの私は何も身に付けておらず、髪の毛もぼしょぼしょとはえているだけ、歯もまだありません。自分では何もできない赤子でした。

そして私は大きくなり、立派になりました。その姿を母に見せることができ、私は本当に幸せでした。

しかしその母もういません。私をおいて亡くなりました。私も気がついたら、すっかり年をとってしまいました。私は今、母が私を産んでくれた時と同じような体になってしまいました。ほら、すっかり歯が抜け落ち、赤ちゃんみたい。だから“さしすせそ”が上手に言えません。」

と言って、みんなの前で入れ歯を取り、歯のなくなった口元を見せ、そこにいるみんなを大いに笑わせました。

シスター曰く、いつまでも悲しんでいるのではなく、せっかくの人生、笑って過ごしましょう。良いことも、悪いこともある、それが人生だというお話でした。

【アメリカで思ったこと】

アメリカに行った時思った。アメリカではごみの分別をしないのか？と。

日本だと紙だの缶だのと、ごみ箱が別々にあるが、アメリカではそれを見かけなかった。全てひとつのごみ箱に捨てている印象があった。もしかしたら技術の進歩で、いちいちゴミを別々に捨てなくても良いのかもかもしれない。でもそれでは国民のゴミに対する意識（再利用するという）は向上しないのではないかと思った。

政府・企業がゴミの処理技術を向上させるのはとても良いことだが、何よりもそのゴミを出す本人、つまり国民の意識を上げることがもっと重要なのではないか？

スーパーで買い物をする時、恐ろしい量のビニール袋に品物を入れてくれる。マイバッグという意識はほとんどない。レストランに行っても、必要以上に渡す紙ナプキンや、使い捨てのお皿。ファーストフードの店では、捨てる時も分別するわけではなく、ただゴミ箱にポイ。

う〜ん、アメリカの皆さんはゴミを出すということに対して、どう考えているのであろうか？

ルワンダだって、もう数年前から環境を破壊するという理由でビニール袋の使用は禁止されている。だから買い物に行く時は、みんなマイバッグを持っていく。持っていない人はお金を払って紙袋を買うのである。

そのおかげで、今まで町中のゴミとなっていたビニール袋は姿を消した。たまに肉屋で肉を買おうとビニール袋に入れてくれるが、それも環境に害のない特別なビニール袋のようである。空港や国境では、持ち込まれるビニール袋を取り上げられるくらいの厳しさである。

そのうちルワンダがペットボトルの規制を始めるのも、そう遠くない未来である。

ゴミの問題に対しては、アメリカの皆さんよりも、ルワンダの方が身近に感じているように思うのでありました。えらいぞ、ルワンダ！

【あの頃の危険な遊び】

大虐殺が終わって間もない頃でも、子供たちは遊びを発明するのに必死だった。その頃は手榴弾や砲弾が落ちていくことはしばしばだった。学校の校庭や道端、近くの原っぱなどにである。彼らはそれを拾い集める。そしてたき火や、日本で言う七輪の中に放り込むのである。

当然、爆発する。それを見て楽しむのである。

あるいは砲弾から火薬を抜き出し、その火薬を線を引くように撒き、その先端に火をつけ、火が伝わって燃えていくのを見て騒ぐのである。

これは危険な遊びではないか！彼らも見つかったら怒られるのはわかっているから、決して自分の家の七輪の中に砲弾を投げ込むことはしないし、危険であることもわかっているから、人のいるたき火の中には放り込まない。

それにしても…である。きっとその遊びで命を落とした子供もいるであろうに…。子供はいつの時代でも、遊びが全てなのである。



日本事務所より

【ひとりごと】

アメリカからアフリカに向かう飛行機の中は、エチオピアの人たちでいっぱいだった（エチオピア航空を使ったから）。私の隣に座ったのは、エチオピアの初老の女性。彼女の前の席には、同じ顔をした30過ぎの男性。きっと息子であろう。その男性は機内で出されるヘッドフォンを左右逆につけてしまうような、ちょっと田舎者丸出しの様子であるが、何かあるにつけて後ろに座っている母親の面倒を見ている。どうやら母親は英語が全く話せないようだ。

機内サービスがあると「何を飲む？」とか「おいしかった？」とか、エチオピアの言葉で話しかけている。きっとその男性は、何年か前故郷から一旗揚げようとアメリカに出てきたのであろう。数年が経ち、アメリカでの暮らしも落ち着き、故郷から母親を呼び寄せた、そんな感じだ。そして今、母親を連れて、祖国に残した家族や友人に会いに行くと言ったところか。

彼の母親を見る優しい目、そして飛行機で緊張している母親に話しかけるしぐさ、それを見ながら、私ももっと親孝行をするべきだったと後悔する。

もう一度、父を連れてルワンダに行きたかったな。そう思いながら過ごした13時間の飛行機の旅だった。

【日本で逢いましょう！】

1月から約3ヵ月間、ガテラも私も日本に参上いたします。なぜかいつも寒い時期になってしまい、ガテラにつらい思いをさせてしまっていますが、その分温泉の楽しみもあるし（本当に行けるのか？）、鍋をつつく楽しみもあります。

今回もいろいろところでワンラブやルワンダのお話をさせていただこうと作戦を練っている最中。今年一年いろいろなことがあり、話したいことは山ほどあります。

報告会や講演のお知らせはHPやブログなどでアップしますので、チェックしてくださいませ。

また私たちの話に興味のある方（個人・学校・団体・企業など）は、ぜひ声をかけてください。どこでも参上いたします。

1年ぶりの日本、昔からの友人に会えることが楽しみであると同時に、新たな出会いがあることを期待しつつ。

それでは皆さま、日本で逢いましょう！

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

年賀状を準備する季節ですが、もしも書き間違えてしまった、たくさん買すぎてしまったという方は、ワンラブにお譲りください。切手に交換し、通信発送などに使いたいと思います。

送り先は下記の住所へ。よろしく願います！

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信47号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（8月～10月）。

8月	800,880円
9月	161,110円
10月	70,860円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました（10月31日）。

義足	82本
装具	35本
杖	543人
車いす	8人

*ブルンジの巡回診療で受け付けた障害者たちに、たくさんの義足や装具・杖を渡すことができました。

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【ボランティア健闘中！募集もしています】

ルワンダでは現在ボランティアの青年が健闘中！ルダシグワ真美と同じく茅ヶ崎出身のG君。今号の記事にあるレストラン運営をひたすら黙々と手伝ってくれております。さらにルワンダでのレストラン経営を虎視眈々と狙っているK青年。

G君は口数は多くないし、初対面の時はなんとなく頼りなかったけど、実は心の通ったしっかりした男性。K青年はいい加減そうに見えるものの、自分の生き方を探しながら突っ走ろうとしている、ちょっと後押ししたくなるタイプ。

久しぶりの男性のボランティアに力強さを感じます。

ルワンダでは引き続き、人材募集中。特にレストラン運営をビジネスとして考える人、大歓迎。また日本的な料理ができる人も探しています。興味のある方は、ぜひ名乗りを上げてくださいませ！

【物資のご支援ありがとうございました。】

引き続き輸送費ご支援のお願い

物資の支援をお願いしておりましたが、ここでひとまず受付を終了させていただきます。ご協力くださった皆さま、本当にどうもありがとうございました。

集まった物資は再度内容をチェックし、種類や数などのリストを作り、ルワンダへ向けて輸送する予定です。

しかしながら現時点でまだ十分な輸送費用が集められておりません。コンテナを輸送するための費用については、引き続き業者などと相談し、適当な方法を検討していきます。

日本からケニアのモンバサ港まで約60万円、ケニアからルワンダまでの陸送費用また通関費用として同額の60万円、合計120万円を想定しています。

皆さま、ぜひコンテナ輸送費のご協力をお願いいたします。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信48号 2012年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

